

# 満蒙開拓青少年義勇軍の送り出しと教育的背景

——戦前期の『近江教育』誌から見る——

田 中 哲

〔抄 録〕

本論考の目的は、1931年から始まる15年間の戦争に対して国民の支持はどのように進んでいったのかを、学校などの公共機関の働きかけから明らかにすることである。満蒙開拓青少年義勇軍の送出に滋賀県教育がどのように関わったのかを、戦前の『近江教育』誌から考察する。そのため『近江教育』誌に掲載された満州に対する教員の理解・認識と実際の現地視察の報告から教員への影響を検討する。国の戦争遂行策を支え青少年の大陸への送出を勧めた教育の姿を『近江教育』誌を通して明らかにする。

**キーワード** 満蒙開拓青少年義勇軍、『近江教育』誌、滋賀県教育会、教員の勧め、教員の満州視察報告書

## はじめに

戦争の遂行は為政者・軍部・財界が一体となって進められるものである。しかし為政者たちの判断だけで起きるものではない。その背後にある国民の戦争へと向かう意思や戦争政策を支持する国民の気持ちが大きき力になると考える。

本論考の目的は、1931年から始まる15年間の戦争に対して、国民の支持はどのように進んでいったのかを学校などの公共機関の働きかけから明らかにすることである。

満蒙開拓青少年義勇軍に関する研究では、満蒙開拓青少年義勇軍を子どもたちの悲劇と捉えた上笠一郎（『満蒙開拓青少年義勇軍』1973年、中公新書）、学校や教育が青少年義勇軍の送出にどう関わったのかを問うた陳野守正（『先生、忘れないで！』1988年、梨の木舎）、青少年義勇軍と公教育との関係を実証的に研究した白取道博（『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』2008年、北海道大学出版会）、青少年義勇軍の渡満の動機を解明した後藤和雄（『秋田県満蒙開拓青少年義勇軍外史』2014年、無明舎）、小林信介（『人びとはなぜ満州に渡ったのか』2015年、世界思想社）など青少年義勇軍の渡満動機を教育との関係で明らかにした労作がある。

教育の力に着目した白取らの研究から次のようなことが明らかになった。

①満蒙開拓青少年義勇軍の送出には公教育が深く関わった。

②満州移民の要因を経済的な貧困だけに求めることはできない。

③満州移民事業は青少年義勇軍を欠いては存立し得ないが、総じて青少年義勇軍の送出状況と一般成人移民の送出状況とは必ずしも一致しない。

満州移民の背景には広大な土地を求めた貧しい農村の生活状態が考えられるが、本研究では、当時の教育、社会風潮がいかに満州移民を進めたかを考察する。全国2位の青少年義勇軍の国からの割り当てに対する高い編成率<sup>(1)</sup>を生み出した1930年代の滋賀の教育を滋賀県教育会発行『近江教育』誌<sup>(2)</sup>をもとにその影響について考察する。また、満州移民体験者の聞き取りを通して、教育の影響について確認する。

『満州開拓史<sup>(3)</sup>』によると、滋賀の一般人の満州への移民は全国最下位の47位で93人にも関わらず、14歳から19歳の若者からなる青少年義勇軍は1,354人と多く送出している。県人口全体に対する青少年義勇軍の割合で見ると全国平均は0.14%に対して滋賀県からは0.19%と平均より多い<sup>(4)</sup>。後に見るように青少年義勇軍への応募動機に教師の勧めが圧倒的に多いことと合わせて考えると滋賀での教育の力の大きさをあらためて感じる。

『近江教育』誌に着目したのは、発足当時から滋賀県の教員のうちの600名を超える会員を持ち、十年後の1899（明治32）年には1,004名の会員を持つに至り<sup>(5)</sup>、滋賀の教育の進め方を知り上で教育全体に大きな影響力をもたらしたと考えるからである。

また、この時期教育を支えた滋賀県の教育行政の方針も郷土教育から祖国愛の教育へ、労作教育から食糧増産を旨とする勤労教育へ、公民教育は皇国民の錬成と兵式集団訓練へと変質させられる（『滋賀県史・第6巻教育編』89頁）。さらに後述するように、1938年滋賀県知事が県会に茨城県内原にある青少年義勇軍の訓練所と同様の訓練施設を滋賀県にも作るよう求める意見書を出し、青少年義勇軍の送出に積極的に乗り出している。こうした行政の動きも合わせて見ていきたい。

## 1 満州移民と満蒙開拓青少年義勇軍

1932（昭和7）年満州国が成立したその年から満州移民は次の二つの目標を持って試験移民として始められる。目的の一つは日本の食糧増産、あと一つはソ連や中国との国境防衛である。計画では、20年間で100万戸、500万人の送出が目指された<sup>(6)</sup>。当時の日本の人口は約7,000万人だから、この数は実に14人に1人を満州に移民させる計画であった。実際の移民数は約30万人と推計されている。滋賀県からは青少年義勇軍を含め1,700余人が満州の地に渡っている<sup>(7)</sup>。

満州の土地は、建国当時約3,000万人の人口があった。1940（昭和15）年には4,000万人を超える人口になった。その多く90%が中国人で、他に朝鮮人、モンゴル人、回教徒<ママ>、ロシア人が居住していた。日本人は約50万人であった<sup>(8)</sup>。また移民の時期区分は3期に分けられる<sup>(9)</sup>。

第一期は1932年（昭和7年）から1935年（昭和10年）の試験移民期。

第二期は1936年(昭和11年)から1941年(昭和16年)の本格的な大量移民期。

第三期は1942年(昭和17年)から1945年(昭和20年)の崩壊期。

青少年義勇軍は1938年から1945年まで各府県で募集されている。年齢は数え年16歳から19歳までとされている。そして、次のような訓練を経て満州で働くことになる<sup>(10)</sup>。

- ①茨城県内原訓練所で3ヶ月軍隊を模した訓練を受ける。
- ②満州国に渡る。
- ③満州国内の「青少年義勇隊訓練所」で3年間訓練する。
- ④おおむね300名(中隊)を基本に入植する。

青少年義勇軍の人数は全国で10万1,514人で、滋賀県からは1,354人であった<sup>(11)</sup>。1938(昭和13)年拓務省統計によると県人口に対する青少年義勇軍の送出比率が滋賀県が全国一位になる<sup>(12)</sup>。1941(昭和16)年滋賀県の青少年義勇軍「滋賀中隊」(後の「第四次小波義勇隊」開拓団)が編成される。同年3月に滋賀県送出郷土中隊として内原訓練所に入所。同年6月黒河省嫩江訓練所に入所。1944(昭和19)年6月琿春県崇礼村、馬河川子屯に入植している<sup>(13)</sup>。

## 2 満蒙開拓青少年義勇軍の送出の背景

白取道博はその著書『満蒙開拓青少年義勇軍史研究<sup>(14)</sup>』の中で、青少年義勇軍推進の力として教育の力について次のように述べている。

法的強制力のない青少年義勇軍の存立の要諦は青少年の＜能動性＞を組織することにあつたのであり、その要員の確保は、いかなる空疎な営みもその名の下に遂行し得る＜教育＞なる観念を媒介することによって可能であつた。

続いて満州へ青少年(国民)を送り出した力として、

満州移民事業は青少年義勇軍を欠いては存在しなかったし、それは当該期の公教育の機能に着目せずには認識できない。(中略) 青少年義勇軍に関する限り、基本的な政策の展開過程を把握するに足る実証研究を我々は共有していないのであり、資料の探索、基礎的事実の確定という作業から出発しなければならない水準にあるといつてよいだろう。

と教育の影響の大きさに着目しながら実証研究の遅れと大切さを指摘している。

満州移民に関する先行的研究である『満州移民～飯田下伊那からのメッセージ』では長野県下伊那地方からの満州への移民についてのまとめがある<sup>(15)</sup>。長野県は、満州国の成立の翌年1933(昭和8)年3月28日早くも満州愛国信濃村建設委員会を発足させている。さらにそれに先立って1932年の建国の年の9月には軍事訓練・農事訓練した第一次武装農民を盛大な見送りをして送り出している。

下伊那地方は主産業の生糸産業が1929年の世界恐慌以来極端な不況に陥った。また寒冷山間で米作りに頼ることが出来なかった。満州移民の数は26,322人の農業開拓民と6,942人の義勇軍がいて全国一位である。長野県では、映画会、講演会、村の新聞などで「満州へのあこが

れ」を盛んに呼びかけている。また、移民勧誘員が各家を回って満州移民を勧めている。また、教育関係者の満州視察も1932年から39年にかけて8回に及んで行われている。さらに、青少年義勇軍の訓練所である茨城県内原訓練所での講習会、信濃教育会中心の臨時教育集会を開催して3,000人の教員を集めている。

森口朗によると1942年に内原訓練所に入所した青少年の応募動機は以下の通りである<sup>(16)</sup>。

教師の勧め	9,390人
父兄の勧め	1,333人
友人の勧め	329人
官公吏の勧め	112人
新聞	131人
雑誌	253人
ラジオ	55人
ポスター	29人
映画	136人
講演	583人
その他	20人

設定された初年度の1938年募集は、ジャーナリズムが宣伝してくれたことや「20町歩の耕地」の地主になれるというキャッチフレーズが功を奏して、青年団や小学校のテコ入れなしでも応募者が32,782人と多数集まり、最終的に24,374人が訓練所に入所した。しかし、その後の募集は減ってきていると森口は指摘している<sup>(17)</sup>。

1937年11月第一次近衛内閣の時に創設されて以来、上にもあげたような推進、激励、宣伝勧誘が拓務省拓務局からなされた<sup>(18)</sup>。具体的には、

- マンガパンフレット「あなたも義勇軍になれます」（田河水泡作）。
- 村の新聞宣伝「満蒙の沃野開拓に行け、若人よ大陸へ」。
- 地元新聞には「早く一人でも多くの日本人が満州へ」の呼びかけ文。
- 義勇隊募集ポスター「働けば10町歩の土地がもらえる」。
- 写真に「大きなキャベツ、大きな石臼、軍事訓練、吊り井戸の水汲み少女、地平線まで続く農地、国民学校」。
- 出発には、軍人同様の盛大な壮行会の開催。

など青少年の満州への気持ちをかき立てた。

長野においては、信濃教育会、在郷軍人会、村レベルの指導者が郷土の名をあげようと他県・他村と応募者数を競った。また、『満州移民～飯田下伊那からのメッセージ』では「青年個人でも行けば土地がもらえる・土への強いあこがれ・過酷な環境で自分を鍛えたい・満州

における農業経済の発展が日本の国の発展に結びついているのだという使命感と誇りが彼らの心を支えた」と述べられている<sup>(18)</sup>。

### 3 『近江教育』に見る教育的指導の変化

#### (1) 『近江教育』に描かれた満州

山本詩風は、満州国成立の年、1932年の『近江教育』2月号に「満洲の風雲愈々急なる秋」(山本詩風)という文を掲載している。

##### 【史料1】「満洲の風雲愈々急なる秋」(22～26頁)

昭和六年長月、これこそ吾大和帝国に取って實に、永に忘れ得ぬ一大痛恨事であろう。又日本帝國の淨沈に関する重要問題であろう。私は今茲に其の重大なる所以を繰返へさない。只彼の零下三十度の満蒙の天地に皇國の爲東洋平和の爲に、雄々しくも立った大和男の子に満腔の敬意を表すと共に、哀れ彼の毒刃に花々しくも撤去せた大和櫻を、心から拝みたい氣で一杯である。(下線部は引用者、以下も同じ)

また、山本は満州事変勃発の目的を日本のため、東洋平和のためと説き、満州の大地に立つ人々に心から敬意を表すと述べている。続いて、日露戦争で亡くなった忠勇将士に敬虔の念を述べ、その行為を讃えている(【史料2】)。そして、この中で国家総動員の意気でこの難局に当たるべきとの教職員に対する強烈な訴えを行っている。こうして、教育の世界にも軍国主義が具体的には満州に対する思いが反映させられたものが県下の教育界を覆い始める兆しが早くも感じられる。

##### 【史料2】(「同」2月号22～26頁)

萬世一系皇統連綿として三千歳、誰が聖恩の無窮なるに感泣せざるものあらんや、私はこの意味に於いて不世出の聖天子明治大帝が、雨につけ風につけ、日露大戦に於て肉親の赤子を思ふ親心のそれにもまさる大御心の一端を偲び奉って、かの満蒙の曠野に散失させた大和櫻の英靈を弔ひ、彼地に活躍せる神州男子に呼びかけ、翻って一億萬同胞に一大奮起を促したいものである。(中略)

嚴寒零下三十度萬物凍結する満洲の荒野に、吾が大和民族の爲雄々しくも起こった大和櫻よ、上に聖天子おはす神洲の国の満蒙に於ける正當なる権利の爲に、東洋の平和の爲に日本帝国の男子として其の精華を期して頂きたい。今や満蒙の天地は大に進展し、日本帝國又快哉である、日本帝國の一赤子として大御稜威を仰ぎ奉る吾等は、其の聖恩の偉なるに感激し、國家總動員の意気で此の難局に當るべきである。

満州国建国翌年の1933年、水口村立水口小学校校長の大橋萬治郎は「現下教育者に対する要望」と題して次のように述べている。(『同』6月号21～26頁)

目次を追うと、①大君を思う一念②軍人精神と教育精神③軍人の勤務の其れ様に④今日の理念はとなる。



①大君を思う一念では、「亡私奉公は、聖上陛下御即位の際賜った御垂訓であるが亡私奉君をその基點とし、國民生活の第一原理として、奉公奉仕への生活を擴充せねばならぬ。」と冒頭で述べ、関東大震災に際しての東郷元帥が第一震の大動揺に直面して、「大禮服を出せ」と命じ、転倒しつゝ之を着用し、陛下のご安否や如何にと宮中に馳せ参じたとの事を例として、教育者にも滅私奉公、滅私奉君を説いている。

さらに、「故人であるが今に畏敬する莒同僚の一老師がある。別に資格も實力もない所謂取るに足らぬ先生ではあるが、大君を思う一念だけは見上げたものである。」として、職員懇親の会食の場で、一青年教師が興に乗じて茶目を發揮して自分のことを「朕」と言ったことに対して、老師は「不敬漢、その一言は將に死罪に價するぞ」と非憤の涙を流しつつ厳然と叱責し「汝の如き者と共にすることを忍びず」と席を蹴って退席帰宅した。上は東郷元帥から下は一老師まで絶対的な忠君と天皇敬愛の実例とし、求められる教育者としての資質を問うている。そして、大君への忠誠なき者に対して、「これで陛下に申し訳が立つか亡私奉君を自己生活の統制原理とし、この根本信念を以て自ら修養に努め業務に淬勵し児童に接したいものである。資格は無くとも一老師の様な教師になりたい教師がほしい。」と、明確に末端の教師にまで滅私奉君を説いている。このことは、児童の教育に天皇への忠誠を第一に考える、いかにこの時代に合った教師が求められていたのかを明らかにしている。

②軍人精神と教育精神、③軍人の勤務の其れの様には、教師の仕事に生ぬるい姿勢を許さず、教育への情熱を求め、軍国日本の教師としての使命観を強く訴えかけている。大橋は、職員会議などあらゆる機会に教育勅語の精神の喚起を促し、その熱意を国民教育者の矜持だとしている。こうした呼びかけは現場の教師を緊張させ、体制擁護からはみ出さない教師を生み出すことにつながっている。

【史料3】「現下教育者に対する要望」（22頁）

教育精神が軍人の其れの如く全教員に普及徹底しているであろうか。（中略）言う迄もなく教育勅語即教育精神であろうが更に廣く深く現代的にも考へねばならぬ。我郡では「聖旨と誓」という小冊子を編纂して勅語詔書御沙汰並びに教員の心得その他本會の各種の宣言決議等の事項を答載し、各自常携帯して隨時味讀奉體すると共に、苟も職員會其の他職員會合の際には冒頭に輪番奉讀して教育者たるの純情熱意を喚起し、國民教育者たるの矜持をなし聖旨奉體の念を沸き立たせて居る。

【史料4】同上（23頁）

勇士が、陛下の萬歳を唱えながら莞爾として戦場の露と消え護國の神となる如く、吾等は教え乍ら教壇上で大往生を遂げることを無上の名譽念願とせねばならぬ。少し位の病氣や事故のための缺勤や遅刻早引するような微温的勤務態度では櫻咲く日本の教育者ではない。命懸けの教育戦場だ。

④省略

また、1932年の『近江教育』誌には法学者や経済学者が登場し、政治や経済の面から満州進出の正当性を説いている。

満州国建国の1ヶ月前の2月号には「政治史上より觀たる滿洲」と題して法学博士米田實が寄稿している。その中で米田は、日本の大陸進出をイギリスの大陸政策を例にあげ17世紀のフランスのベルギー進入や18世紀のベルギー・オランダの合併を仏・独が勧奨したこと、そして第一次世界大戦ではドイツが条約を無視して他国を侵略したことを引いて、満蒙への関心は日本防衛の正しい選択である、と説いている。

【史料5】政治史上より觀たる滿洲(1～13頁)

日本が深く満蒙方面に關心を持つのは、国家の自己保存の心理からである。勿論満蒙に於ける經濟發展等の事情もあるが、これはその後に来たもので、最初は單に外國の侵掠に対する日本防衛なる心理がもとである。これは恰度アジアに對する日本の地位と同一地位にある英國の政策も同一である。(中略)日本は日清、日露の兩戰役によって満蒙と關係を有し、條約によっていろいろ權益を獲得し、この地の文化的、經濟的發展に大なる貢獻をなして來たのである。而して人口二千四五百萬人を數ふに至ったのは、一に日本が滿洲を平和の天地にし旅行に便なる滿鐵を提供したからである。即ち日本の力によって満蒙發展の力を與えたのである。従って日本の權益を害し、條約を無視するが如き支那の行動は正しいと云う事は出來ないので、日本はこれに対して大いに主張し得るのである。

同じく4月号には、經濟学博士の木村増太郎が登場し支那の満州への權益のないこと、日本が満州の資源を開発することが支那の利益につながると述べている。こうした前提に立って、満州へ積極的に出て行くことが日本の国益を守ることになると教員に説いている。上記の政治面そして以下に取り上げる經濟面での満州に対する日本の權益の優位性は疑いなく教育の中に反映されたと思われる。木村増太郎はこう述べている。

【史料6】世界經濟と滿洲問題(1～8頁)

情勢を考へると、あらゆる點から見て、日本が滿洲の資源を開發して行くことは、必ずしも日支の衝突ではなく、寧ろ日支の共存共榮でなければならぬ。我國は從來甚大なる企業資金を満蒙に投じて、資源開發に努めて來たのである。(中略)過去二十年間に於ける支那本部の貿易は今日三倍に増加してゐるに過ぎないが、滿洲に於ける海外貿易はその間約七倍半に上つてゐるのである。かくの如き満蒙の經濟發展は、日本の投資と、その經營によると云うことは否定されない事實である。これによって日本も利益を得た。併し支那が得た利益は更に莫大なるものである。従って日本がその生存權を満蒙に伸ばすことは、決して支那の利益と衝突するものでなく、寧ろこれによって共に利益を得るのである。

如斯日本の満蒙政策は日支の共存共榮である。従って吾々は何國に対しても少しの遠慮も不要である。從來の消極政策を捨て、今後は益々積極的に進まねばならぬ。のみならず若し日本が以上の政策を捨て、全く満蒙から手を引いたならば、云うまでもなく、

満蒙経済は崩壊することは明らかである。

現場の教員は政治・経済の面での知識が少なく、満州の政治上、経済上の実情を十分に理解していない中、こうした専門家を論説巧みに活用した手法は教員に満州進出の正当性を納得させるものとなったと考える。

## （2）満州への教員視察派遣とその報告書

1933年の8月、早くも教員の海外への派遣の呼びかけが始まる。『近江教育』誌8月号には、京都市中等教員海外派遣の記事が載り、「小学校教員は満洲へ」の次の呼びかけがなされた。

### 【史料7】小学校教員は満洲へ（33頁）

京都市教育部ではこの夏休み中に市立中學校教員に海外視察を行はしめることとなり、七月廿五日までに希望を申出でさせたがヨーロッパ、アメリカ方面に赴くものは一千圓を補給し、南支、南洋方面に赴くものには五百圓を與へ後者の場合は二人に補給せんとするものである。

なほ小學校教員に従前夏季出張せしめてゐたものは今年は秋に延期し十月中、下旬ごろ満洲に派遣することとなった。例年この恩典うけるものは小學校長、主席訓導ときまてゐたが本年は女子教員會の希望もあり校長のほか女教員も参加せしめるはずで一人あたりの打切旅費は二百圓である。

満州への青少年義勇軍の派遣は5年後の1938年からであるが、教員の派遣は1933年には始まっている。選ばれて派遣された教員の目的は何か。派遣された教員は満州の何を見て、どのように感じたかを教員や生徒にいかに伝えるか、大きな役割を担わされていると思われる。満州事変後、教育で起こった満州への高い関心、満州を日本の一部として教える教育内容の強調、そして国策に沿った教育を進める教員が求められた。

翌年には満鮮中華民國を視察する全国教育視察団の参加が呼びかけられ、滋賀からも参加者を得た。

### 【史料8】満鮮中華民國を視察する全國教育視察團 1934年4月号（94頁）

文部省が選定する福德生命の海外視察員は毎年十八名宛全國の教育關者で欧米南洋朝滿中の各方面の視察をなしすでに七回を重ね百二十餘名に達し、その視察録は全國の各學校に配布し世の好評を博して居るが第八回の本年度は日本の生命線滿州及中華民國の認識を得る爲めに特に左記二十七名を選定し東朝鮮から北滿に入るコースで

これは未だ嘗つて試みなかった事で世の注目を惹いて居る。因に出發は五月十六日なり。

#### 記

#### 第八回福德生命海外視察員職氏名

職別	職名	氏名
師範學校主事訓導	滋賀県師範學校付屬小學校主事	玉置邦平



【以下二十六名は省略】

全国から派遣された名簿には、玉置のような訓導7名、視学官7名、小学校長7名、社会教育主事・主事補6名の名前が記載されている。教員の視察派遣の面でも満州が注目され始めている。

同年の8月には滋賀県単独の視察団が結成され、坂田郡息長尋常高等小学校校長北野源治を団長とする「昭和九年度満鮮視察旅行報告」は教員の満州に対する認識とその地の印象を明確に伝えている。

【史料9】昭和九年度満鮮視察旅行報告 1934年10月号 (68～79頁)

北大營の白壁にしぶいた鮮血。南嶺の秋草を染めた血汐大興の雪原に凍てついた皇軍勇士の碧血はやがて耀かしい満洲の建国を招來したのであった。即ち皇軍の神速な樹る行動によって東北軍閥を一掃せる満洲は昭和七年三月一日、事變突發後わづか半年にして獨立した新五色旗の翻るところの民族の憎悪は民族の協和となり、排他の政策は門戸開放、機會均等の國是に代へられた。

幾多流血の犠牲を甘受して満洲國の獨立を助成した日本は更に其王道楽土建設の聖業に対して軍事上政治上經濟上其他あらゆる方面に向つて積極的援助を供與しつつあるのである。啻に善隣としてのみに止らず日本と血脈相通ずる關係に立つ事は勿論である。

満洲國の興廢が日本の存亡を制する事實も其の「生命線」意義に照らして明らかであろう。又満洲國夫れ自體も日本の実力と威望なくしては到底獨立國としての存在は期し難い事も言を俟たない。つまり日本と満洲とは協力提携する事に於いてのみ始めて其發展が期待し得られるのである。(中略)

此重要なる時期に際し、日本精神に燃え日本國民教育の重任ある教育者、先ず満洲國に対する正しい認識を深め、以て第二國民育成の爲に教育報國の實を擧ぐる事最も緊急なりと痛感しつつありし折柄、光榮にも縣教育会の視察員を拝命し、親しく満鮮視察の途に上ることを得たるは誠に此上もなき幸福であつた。

満州事變と満洲國の建国に対する評価は5名の視察団の評価ではなく、圧倒的多くの教育関係者の認識であつたと思われる。そして「先ず満洲國に対する正しい認識」を深めることを満州への視察の目的にしている点も視察団派遣の大きな狙いになっていると考えられる。上の報告文からわかることは、「満洲國の興廢が日本の存亡を制する」という所謂「日本の生命線としての満洲」は、後に送り出される青少年義勇軍の少年たちにとって満州送出への大きなエネルギーとなつたと思われる。また、「これまで排他の政策は門戸開放、機會均等の國是に代へられた」の認識は、満州移民を可能にし、現地で土地収奪・耕作を勧めることにつながつたと考えられる。さらに、「第二國民の育成」を目的としたことは、満州への家族移民や村ごとの集團移民を進めるものになった。事実、後述する甲賀郡からの移民団には現場の教員もリーダー的な役割を持って参加するようになってくる<sup>(20)</sup>。

### ○満州の現状報告

「昭和九年度満鮮視察旅行報告」は視察を通して見た満州の各地のようすを次のように伝えている。

#### 【史料10】 満洲の現状報告 1934年10月号（72～75頁）

##### ・奉天

満洲國の心臓、冠たる經濟都市の名に背かぬ。報國の赤誠を萬古に示す忠靈塔が今日前に見ゆこの大奉天の盛況、そして着々として見事に建設されゆく大満洲國と遺憾なく雄圖を張る日本人の幸福とをもたらせるかと思へば、敬虔感謝の念を超えて意表の言葉なく只目頭の熱くなるを覺ゆるのみ。

##### ・新京

「新興の意來燃ゆる新京」この一言につきる今新興國の首都新京として世界地圖上に現はれ其の名をシンボライズする「長への春」そのまゝに躍進せんしてゐる。（中略）其中央の大廣場は半径三百米とか、此處に立つて頭を廻らせば見渡す限り一帯の草原にて、遙か彼方に又目前に或は右に左に東に西に豪壯なる。石造建築物が天空に頭角を現してゐる。

##### ・ハルビン

松花江岸の一貧村化して今は五十萬に近く北滿隨一の大都市となる。滿人以外は露人最多次に邦人之に次ぎ其他三十有餘の人種を集めて居る。産業經濟交通の中心をなす。しかも其が現在内地人の手の中に中樞を握るかと思へば日本人、日本精神の偉大さが如實に感ぜられると同時に日本の大陸政策に一區劃を刻まれた伊藤公の其の遭難の地點歴然たるプラットホームの印跡に頭の下るを覺える。

##### ・無順

無盡藏を誇る大抗區を背景に活動する人機械の總てを集むる無順炭鉱は實に東西十一軒、南北四軒約六十六萬平方メートルの廣大なるものである。而も埋藏炭層の厚さ平均四十米最厚二十五米に及ぶ。採炭従業員約三萬人年産量約七萬噸、無盡藏と聞いて甚だ意を強くする。発電所、オイルセール工場、モンド瓦工場等の大煙突林立して一大工業地帯を現出して居る。

##### ・大連

関東洲大連灣に臨んで國際貿易港大連の偉觀がある。極東於ける自由港として又大陸の關門として歐亞連絡の一要衝であり、又新興大満洲國の大玄關としてあらゆる方面に頗る殷盛を極めてゐる。殊に其生命とせる港灣設備に至っては凡そ類例を見ない完備振りである。

經濟都市奉天、首都新京、産業經濟交通の中心ハルビン、無盡藏の石炭が眠る大工業都市無順、そして、國際貿易港大連を紹介している。視察記録を目にした教員は満州の各都市に思いを馳せ気持ちが高ぶったことと思う。彼らが教室で生徒たちに満州をどのような語ったかは容易

に想像できる。狭い日本にいて広大な大地に少年が憧れたことが渡満の力になったと考えていたが、こうした教員の話は少年を満州へと向かわせる大きな推進力になり、このような紹介は少年に憧れを持たす内容になったと思う。

満州の各都市の報告は、満州からの帰国した先輩たちの美談<sup>(21)</sup>や当時の地理教科書の記述だけではとうてい得られない知識と満州への希望をもたらしたものだだった。

#### ○満州の印象

視察旅行の報告集には最後に「満洲の印象」という項がある。次々と目覚ましい発展を遂げつつある満州国を紹介しながら、満州を日本に一体化する動きを加速させる感想となっている。また満州の各都市を日本の援助による近代化の象徴として描き出している。こうした満州の印象の中で一つ「彼らの生活は豚だと言った人がいる」と書いている。

#### 【史料11】満洲の印象 1934年10月号 (77頁)

何しろ満洲は廣かった。それがどれ位の廣さかはあちらへ行って見るまではどうしても概念だけで、構成出来なかったものである。四呎八吋の満鐵線で縦横した時の平野の廣さこんな廣いところがあるのかと不思議になる。(中略)満洲がほんとの自然地なら日本はさしずめ手の凝り過ぎた庭園である。「狭い日本と廣い満州、人口過多の日本と人口希薄の満洲、資源に乏しい日本と資源の満洲、工業國の日本と資源國の満洲、即ち日本と満洲とを打って一丸とし、有無相通ずる時こそ日滿兩國は全く鬼に金棒であり、其前途は明るいものだ」こんな記事で案内書に出ていた。

満洲は今建國の眞最中である。至るところにひるがへる新五色旗、どこへ行っても目を聳てしめる學校と警察の偉大さ、雲の涯てまで貫く眞すぐな大道路、土地はいくらでもある。物資はいくら使って得されも不足しない。産業はどんどん改良されていく。鐵道は新設される。

然し國を挙げての精進努力の裏には生みの親日本が陰になり日向になりして建設の守護神となつてゐる事は見逃せなかつた。軍事上にも政治上にも經濟上にも積極的援助を共與してゐる。満洲國が輝かしい王道樂土の理想國となるのも遠からずと思える。

#### 【史料12】同上 (77～78頁)

彼らの生活は豚だと言った人がある。支那町を歩いて見て我々が先ず辟易としてしまふのは汚穢さである。内地では想像もつかぬ不潔、塵埃の中に大きなまくわを皮ごと噛んでゐる圖などは、我慢の出来たものではない。汽車に乗つても労働者などが傍に居ると何ともいへぬ臭がして来る。そして所嫌わず唾を吐き散らす。持つてゐるのは薄汚ない布団一枚。彼等はそれでどこでもごろ寝をし何百里でも働きに行くのである。生活の簡単さは日本人に取つてある種の脅威である。

#### 【史料13】満洲視察報告書1935年11月号 (43頁)

彼ら(満州人…引用者)の間には相違もあるが何れも治める人間ではなく治められる人

間であることは共通してゐる。満人よく働くとは雖規律がない。きびきびしたところがない豚的である。頭を働かせてゐるやうには思はれない。（中略）吾等日本人は統制ある國民である頭の働く人間である。

広大な自然を讃え、発展しつつある鉄道や都市を評価し、豊かな資源を紹介し理想郷とまで持ち上げている。そしてそれを支える日本や日本人の満州への積極的な関わりを紹介している。しかし、満州の人に対する評価は異なっている。汗して働いた労働者の臭いは満州に限らず日本でも同じはずである。なぜ、満州への研修報告に取り上げたのだろうか。埃の中でまくわを食うことは日本でもあるのではないだろうか。所構わず唾を吐き出す日本人もいるだろう。当時においては着の身着のままで移動した労働者もいただろう。満州のものや資源に日本の國民を引きつける一方で満州に住む人々に対しては嫌悪感や差別感を抱かせる内容になっている。満州ははじめアジア大陸への進出を考えると、この人々に対する感情はその後の日本軍の行動につながるものであると考える。

視察団は教員の集団である。そして校長や訓導である。こうしたリーダーともいべき人たちが平気で報告書に満州に住む人たちのことをこのように書いて受け入れられることは満州への侮蔑、満州人への差別を無批判に受け入れる当時の日本の教育の土壤が想像できる。報告書は最後に「わが生命線の満洲、意義深い獨立國満洲、内地の人は一度行ってその状況を觀察すべきである。特に青年の士に望む」（同44頁）と結び、報告者が若者を対象にしていることも伺われる。

一方では、満州を理想郷として描き出し、移民や義勇軍を勧めながら、もう一方で「満洲人は豚だ」と決めつける教育は、満州事変に始まる15年の戦争がアジアを侵略しアジアの人びとに犠牲を強いる戦争へと進んでいく推進力になったと考える。

1937年の「満鮮視察の報告」では、朝鮮満州の現状を視察するだけでなく視察団の磯村利一（淡海高等女学校教諭）は「滋賀縣人雄飛せよ」と呼びかけている。

#### 【史料14】満鮮視察の報告 1937年1月号（75頁）

車中で遭つた本縣出身の一満鐵社員は、満洲に進出してゐる滋賀縣人は極めて少い。八月末の大朝滋賀版には政府の折角補助があるにも拘らず本年本縣の移民割當は十戸であるのに申込は僅かの五戸、而もその中三戸は他府縣より本縣に移住して來た者であると傳へてゐる。在満内地人は異口に満洲で働くとは内地に帰りたいとは思わないと云う。猫額大の地に齷齪とせず少し本縣人は考える必要があらう。

と述べ、視察報告書から「滋賀縣教育會の命」を受けた移民を進める視察であることを前面に打ち出している。

### （3）満蒙開拓青少年義勇軍送出と教育

○拓務省による青少年義勇軍推進の指示

1938年、拓務省は文部省と連携し、学校・青年団に対して「帝國在郷軍人会ハ地方町村長学

校長等ト協力シ町村内ニ於テ滿洲青年移民（青少年義勇軍）ノ趣旨ヲ普及シ之ガ奨励ニ努メラ  
ルルコト」等の滿蒙開拓義勇軍の募集強化を指示する<sup>(22)</sup>。長野県では市町村長・中学校  
長・小学校長・青年学校長・青年団長に宛て以下のような内容の通牒を出している<sup>(23)</sup>。

- ・応募勸奨にあたる教職員に対する趣旨の徹底。
- ・青少年とその家族や地域住民に対する教職員による学校内外での趣旨の普及。
- ・青年団の募集活動の督励についての配慮。

滋賀県内においても海外進出を進めるべく「消極的な退嬰的な島國から、積極的進取的なる  
べき海國に改める」と「海國民教育」の実践指導案が『近江教育』誌に掲載される。筆者の押  
立小学校の石森庄作は「凡そ教育に先立つものは教師自身である。何よりも先ず教師自身が海  
を知り、海軍を知り充分、海軍に關する知識を持つておらねばならないことは言を俟たぬ事實  
である。（中略）一九三八年以降の東洋史は誰が書くか。それは日本海軍が書く。どこかでこ  
んなことの書いてあつたのを記憶してゐる。」（同年5月号、121頁）このような授業を提案し  
アジアに進出していく必要性を教師に訴えかけている。

同じく39年には滋賀県知事による「滿蒙開拓青少年義勇隊訓練所設置ニ関スル意見書」<sup>(24)</sup>  
が県会議長に提出されている。（1938年12月10日）、

**【史料15】「滿蒙開拓青少年義勇隊訓練所設置ニ関スル意見書」**

（前略）優秀ナル青少年ヲ滿支ニ送り開拓ノ業ニ就カシメ國防、防共、經濟ブロックノ新  
文化建設コソハ最モ喫緊ノコトニ属ス政府ニアリテハ夙ニ此ノ點ニ力ヲ致シ茨城縣ニ滿蒙  
開拓青少年義勇軍訓練所ヲ設置シ既ニ第四回ノ義勇軍ヲ選出セラレタリ而シテ仄聞スルニ  
本施設ノ拡充ヲ企畫シ更ニ同訓練所ノ増設ヲ關西ノ地ニ求メラルルコト之カ建設ニ方リテ  
ハ種々ノ條件ヲ具備スル地ヲ撰擇セラルルコトハ勿論ナルモ本縣ノ如ク其ノ地ニ大津、信  
楽ノ宮趾竝日本佛教ノ母体タル叡山アリ且伊勢大廟・檀原神宮・桃山御陵等ノ聖地ヲ控ヘ  
大阪、神戸、敦賀ノ開港場ヘモ百秊程度ノ近キ地ノ利ヲ占ムル精神的、地理的ニ最適ノ地  
ト確信スルヲ以テ之カ建設地ヲ本縣ニ決定セラレンコトヲ政府ニ懇請シ誘致ニ絶大ノ力ヲ  
致サンコトヲ要望ス

右府縣制第四十四條ノ規定ニ依リ縣會ノ決議ヲ以テ意見書及提出候也

昭和十三年十二月十日

滋賀縣會議長 殿

その要旨は、次のようにまとめられる。

- ・心身共に優秀なる青少年を滿支に送り開拓の業に就かして、国防、防共に当たらせる。
- ・關西に内原のような施設を滋賀の地に作りたい。
- ・大津・信楽の宮址や比叡山があり、伊勢大廟・檀原神宮・桃山御陵にも近い。
- ・敦賀・大阪・神戸の港に近くて精神的・地理的にも最適の地である。

このように説いて義勇軍募集の国の施策に積極性を表明している。



さらに、朽木村村長から各区長に次のような内容の「満蒙開拓義勇軍募集ノ件依頼」（1938年3月7日）が出されている<sup>(25)</sup>。

- ・滋賀県の割当数は500名になっている。
- ・内地訓練が2ヶ月、現地訓練が3年間ある。
- ・役場に申し出れば、役場が手続き一切をすること。
- ・独立の農家になるまでは一切費用はいらぬ。

同じような内容の依頼が県内の他の各区長にも出され、積極的な勧誘が学校でも行われたと考えられる。

こうした県や地方の青少年義勇軍の満州へ送出への動きを受けて、翌1934年の『近江教育』誌には青少年義勇軍の満州送出推進の記事が次々と掲載される。「満洲國は日本民族の発展に最も適するところ」（満洲国教育会編輯主任・竹田浩一郎「満洲國教育とは何か」3月号79頁）「北滿には人影もみえない大平原が數米の沃土を堆積して、農耕の士を手招いてゐます」（蘇家屯尋常高等小学校・藤原房雄「満洲の教育事情」4月号49頁）

哈爾濱郊外の満蒙開拓青年訓練所を訪れた三雲小学校訓導北島光三は青少年義勇軍の面々と面会して「本縣出身の青少年四三名は何れも元氣一ぱいだ。＜僕等はもう内地に歸ろう等とは夢にも考へません。親も兄弟もいない者と思って獨力で精一ぱい働いてみせます＞と語る可憐な紅顔の少年を思ふとき熱い涙を感じた」（北島光三「満洲移民地及文化都市視察記」4月号、60頁）と述べている。

県教育会の囑託として、大陸教育視察並びに皇軍慰問のため派遣された藤居（愛知川校）はじめ5名の大陸視察員北支班は『近江教育』誌に次のような報告を寄せている。「北京は美しい街です。私は、この北京と対照して考えるのが、その後に見た満洲國の首都新京の姿です。新しく計畫されてゐる新京の街は、唯一廣野原であります。あるものは廣い空と廣い野原と、そして野原の中を縦横に走る完備した道路だけであります。がしかし、そこに盛り上る新都市の烈々たる氣根はどうでせう。形はまだ整っていないけれど、新興満洲國の旺盛なる力が脈々と鼓動してゐるのが、痛い程感ずるのです。北京は城壁に囲まれた極彩色の街です。新京は開け放しの緑の街です。心ひかれるのはどちらか。過去の文化も歴史も尊い。が、我々はその上にもっともっと輝かしい文化と歴史を建設していかねばならない。それが生活の使命ではないか」「北支雑感」（大陸視察員北支班、1939年11月号、43頁）この報告は満州は新しい歴史と輝かしい文化をこれから創り出すところという鮮烈な訴えが内地にいる教員に届く文章になっている。

太平洋戦争が始まった翌年1942年には、満州開拓青少年義勇隊教学奉仕報告が奉仕隊に参加した2人の文章が掲載されている。三雲國民学校の訓導の源信彦は同校から送った十人の教え子の元気なようすを伝えている。安曇國民学校の大辻子俊次も「先生、ノロ追ひは愉快です。雉子うちも面白いです」と大陸に渡った子どもたちの楽しそうな生の声を伝えている。後に満

蒙開拓青少年義勇軍の体験者の話を聞く中で、多くの子どもたちがいわゆる「屯墾病」というホームシックの病気にかかっているがこの報告書には一切出てこない。(『満洲開拓青少年義勇隊教学奉仕報告』2月号、57～62頁)。

また、同年6月号には毎年自校から満蒙開拓青少年義勇軍を送り出している能登川東国民学校校長の川村傳三郎が国策遂行のため青少年の送り出しのようすを書いている「義勇軍送出に就いて」(46頁)。その中では、卒業生の7名が優秀でみなよく苦勞に耐えて義勇軍の目的と重責を自覺して奮闘して郷土へよい便りを送っていることを述べ、将来さらに義勇隊を増員したいとの考えを寄せている。

さらに1943年には、青少年義勇軍の国の割当てに応えるために具体的な提案が寄せられている。「海軍志願兵及び義勇軍送出について」(北中光治郎・野洲郡速野校、同7月号20頁)。北中は「海軍志願兵送出や義勇軍送出は少し教科とはなれた様には思われますが、然し決戦下の今日國民教育の本質を考えて、之程私たちに課せられた重大な任務はないかと思ひます。(中略)十八年度に於いて昨年度の二の舞を踏むような事があれば、それこそ我々教育者の恥辱であると考えます。」と訴えている。こうして、一人でも多くも軍隊を志願する生徒や義勇軍を希望する生徒を送り出す教員が望ましい教員とされていった。『近江教育』誌が国策遂行にまします荷担していく姿を見ることができる。

## おわりに

教え子を満州に送り出し、自らも指導者となって満州に渡った竹村國三郎は戦後になって、「お国のためとはいいいながらも余りにも無謀な、残酷なたたかいであったことに、限らない矛盾と憤怒を覚える。それが国家的運命とともにしたその人の運であったとあきらめることができない。」と教え子を大陸へと誘った自分の教育について痛恨の反省を述べている<sup>(26)</sup>。

また、長野県の元教員の宮川清治は「忘れられぬ教え子の死」として次のように述べている。「国策でしょう？国で義勇軍出して、そして満蒙の開拓やソ連との戦争のときの覚悟や、そういうことをしっかり国のためにしろっていう国策だったからね……。心じゃおれのように15才の少年を送るなんていうことは、あまりにも人間の命のこと、軽くみてるじゃねえかっていう思いを持った先生は他にもいるよ、いたよ。時代がそういう時代だったから、まあしょうがねってあきらめろって言ったってね、殺した側になると、あきらめきれねえんだ……。 <sup>(27)</sup>」と、教員として命を軽んじた教育への後悔を述べている。

竹村や宮川のような反省を生み出した教育に『近江教育』誌の存在があった。満州国成立の翌年(1932年)から同誌では日本のため、東洋平和のたゑを説き、満州の大地に立つ人々に心から敬意を表すると述べている(【史料2】)。このように同誌には満州事変から始まる15年間の戦争を支持する論調が貫かれている。『近江教育』誌はその翌年には、「現下教育者に対する要望」を掲載している。この中で、教員に大君を思ふ赤子の一念とともに軍人同様に軍国主

義推進の精神の喚起を促し、その熱意を国民教育者の矜持だとしている。子どもたちを大陸へと送り出し、戦争への道に進ませるために教員が教育会とその機関誌『近江教育』誌によって大いに啓発されていた事実が明らかになった。

また、『近江教育』誌に見られる教員の現地研修とその報告集は県下の教育現場に大きな影響を与えたと考えられる。この研修派遣は全国的にも見られ、毎年600人ずつ、夏、冬40日間視察が行われた<sup>(28)</sup>。

滋賀においては1934年の満鮮視察旅行報告に視察の意図が現れている。報告書では、「満洲国に対する正しい認識」を深める目的（【史料8】）で行われたとし、満洲国の興廃が日本の存亡に関わる、日本の生命線としての満州移民が強調される。こうした満州に対する理解や認識が学校を覆い、義勇軍として少年たちを送り出す教員にとってまたとない情報源となっている。

さらに、『近江教育』誌に掲載された「朝鮮・満蒙の防衛は日本の正しい選択である」という政治情報や経済面での満州に対する日本の権益の優位性を説く論文なども国策遂行に積極的な教員をつくり出したと思われる。

戦後、秋田県元教員の和泉とくは次のように語っている「私自身は、進んで義勇軍に送りたいとは思っておらせんですが、どうしても出さなければならない窮迫した現実でした。（中略）不明な私には、満州侵略が帝国主義戦争であることを知りませんでした。他国を侵略しそこに鉄を入れることによって、そこが日本の領土になるなどということのあり得ないことを、当時19才の私は考えませんでした<sup>(29)</sup>」。

県から選ばれた教員や先輩教員の現地での研修報告が配られ、教育誌から得られる経済・政治情報が一方的内容である中で和泉のような教員が生まれるのは当然のことである。

最後に、『近江教育』誌に見られる中国に対する認識を報告した教員の旅行記から見ておきたい。1940年1月号には栗太農学校塚本繁吉を団長とする滋賀県教育会主催支那大陸皇軍慰問並びに視察旅行記が掲載されている。視察旅行は上海—南京—済南—青島である。旅行の目的を同行の堅田小学校の太田彌十郎は「吾々の旅行は現地に於て皇軍将兵の各位を慰問すると共に如何に聖戦の目的遂行のため無私報國の活動をされつゝあるか、その尊き姿に接し次代の國家を背負って立つ第二國民にこの感動を伝えと共に更に大陸の現状を觀て昭和維新の教育に新しき何物かを握りたい意味を持つものである。（後略）」（24頁）と切り出している。そして、南京での感想を次のように述べている。「中山門に至る。高さ四丈の彈痕生々しき巨大な城壁を見てよくも占據したものだ、城内脇の墓標の戦死者の墓標に禮拜すれば胸もつまるような感激を覚える。思えば昭和十二年十一月十七日午後一時半日の丸轡へる各城門から各部隊が堂々と入場した感激が目につくようである。」（30頁）そして、入場した日本兵士の活躍を讀える話、死の道路と化した中山門から中山稜への道を「理想的なドライブウェーだ」と述べ、戦勝に酔った報告となっている。報告の結びは「吾々教育者の仕事は自らの心中にある蔣介石（個人主義的な考へ見方）を排除すべき好機であることを忘れてはならぬ。日滿支共存共栄の一大

聖業に向かって教育道を國策線に沿って活動すべき事を誓って擱筆する。」(35頁)として筆を置いている。

こうしてみると、満蒙開拓青少年義勇軍の送出の準備は満州事変後の早い時期から教員への啓発・研修という形で用意されてきたことがわかる。また、『近江教育』誌にもある満蒙への教員の視察研修と掲載された報告書は県下の多くの教員に影響を与えたと考えられる。本考察は、子どもたちに直接影響を与えた当時の授業を含む教育内容の検討ではないが、青少年を戦時下の満州へ送り出し食糧増産と兵役を担わせた構造が見えてくる。

かつて歴史学者の黒羽清隆は『十五年戦争史序説』の中で次のような指摘を行っている。

どんな権力支配も民衆の下からの一定の支持——また、その支持への意識的な正当化——なしには持続し得ないというマクシムが正しい以上、そして十五年戦争への民衆動員のメカニズムは法令や通達にもとづく物理的強制力の描出だけでは決して説明できない<sup>(30)</sup>。

若者はなぜ青少年義勇軍へ参加していったのか。満州事変から始まる十五年に及ぶ戦争を国民が支持した背景を教育、メディア、地域社会を通して引き続き考えていきたい。

#### 〔注〕

- (1) 満州開拓青少年義勇軍道府県別内原訓練所入所状況 (1938～1941年度)

道府県	山口	滋賀	広島	静岡	愛知	全国平均
割り当て人数充足率(%)	96.7	75.6	71.1	71.0	70.9	52.5

〔註〕 原史料は満州移住協会『開拓』第7巻第5号(1943年5月)16～17頁。白取前掲書8頁より再引用。

- (2) 滋賀県教育会は1887(明治20)年2月27日滋賀県私立教育会として創立。創立式出席者300余名。＜同教育誌『近江教育』は同年4月15日『滋賀県私立教育会雑誌』として発行される＞。明治18年の滋賀県の小学校教員数は2,339名、学校数は662校(『滋賀県史、昭和編』第6巻)。雑誌購読者数は明治32年で500名にのぼる。(『近江教育百周年記念誌』1987年、19頁)
- (3) 満州開拓史刊行委員会『満州開拓史』1966年、464頁。
- (4) 『1941年度版日本帝国統計年鑑』記載の「都道府県の人口一覧」掲載の1940年の人口を母数とする。
- (5) 財団法人滋賀県教育会『創立百周年記念誌』1987年、18頁。
- (6) 白取道博前掲書1頁。
- (7) 『滋賀県史』第1巻278頁。
- (8) 滋賀県総務部総務課(滋賀県平和祈念館)編集・発行『記憶の湖』第4巻、2000年、233頁。
- (9) 『満州移民～飯田下伊那からのメッセージ』現代史料出版、2007年、序ii頁。
- (10) 陣野守正前掲書93頁。
- (11) 前掲『満州開拓史』464頁。

- (12) 辻清『瑋春の青春』瑋春の青春発行会、1975年、6頁。
- (13) 前掲『滋賀県史』第6巻124頁。
- (14) 白取道博前掲書4頁。
- (15) 前掲『満州移民～飯田下伊那からのメッセージ』46頁。
- (16) 森口朗『日教組』、2010年、新潮新書84頁（資料は白取『前掲書』内原訓練所第1次入所者応募動機＜1940～1942年度＞164頁からの再引用）。
- (17) 同84頁。
- (18) 前掲『満州移民～飯田下伊那からのメッセージ』56頁。
- (19) 同序章xi頁。
- (20) 竹村国三郎『北辺の墓標』同刊行委員会発行。竹村国三郎は甲賀郡小原校教員。
- (21) 「吉屋信子が見た義勇隊」吉屋信子『満州大陸に生くる人びと』主婦の友1940年（陣野守正前掲書125頁から再引用）。
- (22) 前掲『満蒙開拓青少年義勇軍』221頁。
- (23) 同222頁。
- (24) 滋賀県『縣會』昭和13（1938）年12月10日。
- (25) 滋賀県平和祈念館所蔵「満蒙開拓青少年義勇軍募集依頼書」より引用。
- (26) 竹村国三郎前掲書、あとがき331頁。
- (27) 宮川清治、長野満蒙開拓記念館編『証言、それぞれの記憶』2013年、81頁。
- (28) 前掲『満州移民～飯田下伊那からのメッセージ』42頁。
- (29) 陣野守正前掲書174頁。
- (30) 黒羽清隆『十五年戦争史序説』（上）、三省堂、1984年、54頁。

（たなか さとる 文学研究科日本史学専攻博士後期課程）

（指導教員：原田 敬一 教授）

2015年9月28日受理